

# 九世紀の城柵と北方社会 — 田村麻呂プランとその挫折 —

新井隆一

## はじめに — 田村麻呂と城柵 —

坂上田村麻呂は、延暦十三年（七九四）から延暦二十二年（八〇三）までの期間に、合計四回東北へ赴いた（表）。彼は、まず一回目は副使として、征夷大將軍大伴弟麻呂を助けた。そして、二回目の延暦二十年（八〇一）には、征夷大將軍・陸奥出羽按察使・陸奥守・鎮守府將軍として、征夷の最高責任者となり、三回目の延暦二十一年（八〇二）には、胆沢周辺の蝦夷の総帥・アテルイを投降させ、造胆沢城使として胆沢城を築城した。さらに、四回目の延暦二十二年（八〇三）には、造志波城使として北へ向かい、志波城を造営した。

また、彼は出羽国の城柵を整備した。出羽郡井口の地に、出羽国府を建てた（『日本三代実録』仁和三年（八八七）五月二十日条）。出羽国府がどこにあったかという論争は、いまだ決着をみていないが、発掘成果と照らし合わせれば、これは、酒田市にある城輪柵に該当する。さらに、大仙市の払田柵も九世紀初頭に造られており、田村麻呂の一連の行動のなかで、設置された蓋然性が高い。払田柵は、九世紀以降の雄勝城にあたる<sup>1</sup>ともいわれている。さらに、天平五年（七三三）に建てられた秋田

城でも、八世紀末から九世紀初頭にかけて、政庁城の全面改修や東門の改築などが行われた。<sup>2</sup>

こうして、田村麻呂の手によって、古代国家は、現在の盛岡—秋田ラインまで城柵網を敷き、陸奥国の北上川流域一帯、出羽国の庄内平野、横手盆地といった地域に大きな拠点を形成したのである。本稿では、これらの城柵を整備することで目指された北方支配の体制を「田村麻呂プラン」と呼びたい。以下の考察では、これらの城柵と田村麻呂プランの実相について、検討していく。

## 一 田村麻呂プランと渡嶋（北海道）

まず、日本列島最北の渡嶋（北海道）からみていきたい。これまで、田村麻呂の征夷期の論点は、陸奥国の城柵の整備や胆沢のアテルイとの戦いに主眼が置かれてきた。果たして、田村麻呂の方針は渡嶋まで及んでいるのであろうか。

〈史料一〉『類聚三代格』卷十九 禁制事

太政官符

禁断私交<sup>三</sup>易狄土物<sup>一</sup>事

右被右大臣宣稱、渡嶋狄等来朝之日、所貢方物、例以<sup>三</sup>雜皮<sup>一</sup>。而

王臣諸家競買<sup>三</sup>好皮<sup>一</sup>、所<sup>レ</sup>殘惡物以擬<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>官。仍先下<sup>レ</sup>符禁制已久。

而出羽国司寛縦曾不<sup>三</sup>遵奉<sup>一</sup>。為<sup>レ</sup>吏之道豈合<sup>レ</sup>如此。自今以後、嚴

加<sup>三</sup>禁断<sup>一</sup>。如違<sup>三</sup>此制<sup>一</sup>、必<sup>レ</sup>処<sup>三</sup>重科<sup>一</sup>。事緣<sup>三</sup>勅語<sup>一</sup>。不得<sup>三</sup>重犯<sup>一</sup>。

延曆二十一年六月二十四日

〈史料一〉は、王臣家と渡嶋蝦夷との毛皮をめぐる私交易に関して、出羽国司を譴責する太政官符である。延曆二十一年といえは、まさに田村麻呂が活躍しているときである。この官符は、彼の報告をもとに出されたのであろう。

やや詳しくみてみると、「渡嶋狄（蝦夷）が来朝してくるときは毛皮を持つてくるが、王臣家が競つて好皮（良質の毛皮）を買つてしまつたため、官には質の悪い毛皮しか残らない。以前にも禁制を出したが、出羽国司の統制が行き届かない。」と解釈できる。つまり、出羽国司よりも先に、王臣家が良質の毛皮を買つてしまうのである。従来、この官符は、渡嶋蝦夷（＝北海道の擦文人）と王臣家との交易の場を秋田城に設定し、秋田城の交易面での機能を強調するのに利用されてきた<sup>3</sup>。しかし、そもそも王臣家は、秋田城において、出羽国司の目を掻い潜り、交易など行えるのであろうか。王臣家と渡嶋蝦夷は、秋田城に入る前に取引をしていたのではないか。しかも、この官符には、どこにも秋田城に関しての記述はない。従つて、〈史料一〉以前は、交易の場を秋田城に設定する

のは困難であろう。いったい、渡嶋蝦夷と王臣家は、出羽国司の目を逃れて、どこでどのように交易を行ったのであろうか。

〈史料二〉『日本書紀』斉明五年（六五九）三月是月条

是月、遣阿倍臣、〈闕名〉。率<sup>三</sup>船師百八十艘<sup>一</sup>、討<sup>三</sup>蝦夷国<sup>一</sup>。阿倍

臣、簡<sup>三</sup>集飽田・淳代二郡蝦夷二百卅一人、其虜卅一人、津輕郡蝦

夷一百十二人、其虜四人、胆振鉏蝦夷廿人於一所、而大饗賜<sup>レ</sup>祿。

〈胆振鉏、此云<sup>三</sup>伊浮梨娑陸<sup>一</sup>。〉即以<sup>三</sup>三船一隻、与<sup>三</sup>五色綵帛<sup>一</sup>、祭<sup>三</sup>

彼地神<sup>一</sup>。至<sup>三</sup>肉入籠<sup>一</sup>時、問<sup>三</sup>菟蝦夷胆鹿嶋・菟穗名二人進曰、可<sup>レ</sup>

以<sup>三</sup>後方羊蹄<sup>一</sup>、為<sup>レ</sup>政所<sup>一</sup>焉。〈肉入籠、此云<sup>三</sup>之之梨姑<sup>一</sup>。問菟、此

云<sup>三</sup>塗毗字<sup>一</sup>。菟穗名、此云<sup>三</sup>宇保那<sup>一</sup>。後方羊蹄、此云<sup>三</sup>斯梨蔽之<sup>一</sup>。

政所、蓋蝦夷郡乎。〉随<sup>三</sup>胆鹿嶋等語<sup>一</sup>、遂置<sup>三</sup>郡領<sup>一</sup>而歸。授<sup>レ</sup>道奥

与<sup>レ</sup>越国司位各二階、郡領与<sup>三</sup>主政<sup>一</sup>各一階。〈或本云、阿倍引田臣

比羅夫、与<sup>三</sup>肅慎<sup>一</sup>戰而歸。献<sup>三</sup>虜卅九人<sup>一</sup>。〉

田村麻呂より百五十年ほど前の七世紀中葉、阿倍比羅夫の率いる大船団が日本海沿岸を北上し、渡嶋まで進出した。〈史料二〉は、飽田（秋田）、淳代（能代）、津輕など北奥羽を経由して、北上したことを伝える。そして、彼は、現地の蝦夷の要請に基づいて、後方羊蹄に政所を設置する。後方羊蹄の場所については、江別・恵庭・千歳の道央低地帯と日本海側の余市周辺とする見解がある。いずれにしても、七世紀中葉の渡嶋に政所と呼ばれる拠点が設置された<sup>4</sup>。

そこで、道央低地帯に、北海道式古墳といわれる本州の末期古墳の流

れを汲む墳墓が営まれたことが注目される。副葬品には、蕨手刀・直刀・農具など豊富な鉄製品がみられる。<sup>⑤</sup>これらの鉄製品は本州で造られたものである。周辺の集落からは、土師器・紡錘車などの生活用具や玉類など信仰を表すものが出土する。<sup>⑥</sup>ただし、この時期の道央低地帯には、在地の伝統的な土壙墓群も拡がる。しかも、古墳同様に豊富な鉄製品を副葬するものもある。異なる二つの形態の墓に葬られた人たちの出自は、違っていたと思われる。むろん、葬送に際しての儀礼なども、それぞれの墓制に応じたものである。とすると、前者の被葬者は、移住者の可能性が高い。

おそらく、移住者の出自は、北奥羽の末期古墳の分布が太平洋沿岸に偏ることから、三陸沿岸から八戸周辺であろう。<sup>⑦</sup>とくに、八世紀前後の時期に、この地域からは、擦文文化と関連の深い、沈線の施された土師器が出土する。<sup>⑧</sup>古墳群の副葬品も類似する。<sup>⑨</sup>ともかく、北奥羽からの移住者と在地の首長層との間で、鉄製品と特産物との交易が行われた。政所はそうした交流の場であり、移住者の使命は政所を管理・運営することであろう。しかも、交易のラインは、道央低地帯と八戸周辺にとどまらない。宮古市長根Ⅰ遺跡、八戸市丹後平古墳群、恵庭市柏木東遺跡では、都で鑄造された和同開珎が出土している。北奥羽の末期古墳で出土する和同開珎は、蝦夷が都へ上京朝貢した際の回賜品と推定されている。<sup>⑩</sup>このことは、北方交易のラインに、都の有力貴族たちが関与していたことを窺わせる。

例えば、七世紀中葉、蘇我蝦夷は、都を訪れた蝦夷を自邸に招いて饗宴を催している(『日本書紀』皇極元年(六四二)十月丁酉条)。また、

七世紀後半には、倭王権は、二百十三人の蝦夷を飛鳥寺西の槻木のもとで饗応している(『日本書紀』持統二年(六八八)十一月丙申条)。飛鳥寺は、倭王(天皇)を頂点とする王権構成員にとつて、思想・学芸・技術などで重要な意味をもった。<sup>⑪</sup>とすると、二百十三人もの蝦夷を饗応するにあたり、そこに駆り出される人々、用いられる食材・容器などは、王権を構成する有力貴族が供出したものである。こうした事例は、蝦夷と有力貴族との人格的な結びつきを示すものである。北奥羽と都を往来する蝦夷は、交易者のような役割も果たしたのである。八世紀前半の事例になるが、長屋王邸宅跡で出土した木簡には、「渤海使」「交易」などと書かれたものがあり、都に入京した渤海使を長屋王が自らの邸宅に招いた様子が知られる。<sup>⑫</sup>この時期入京した蝦夷にも、都の貴族は様々な形で接触を図ったのではないか。すなわち、三陸沿岸の首長層や道央低地帯の移住者のバックには、このような勢力が存在した。

〈史料三〉『続日本紀』養老四年(七二〇)正月丙子条

遣<sup>⑬</sup>渡嶋津輕津司從七位上諸君鞍男等六人於鞆國、觀<sup>⑭</sup>其風俗。

さて、養老四年渡嶋津輕津司の諸君鞍男等六人が鞆國へ派遣された。「鞆」はアシハセと訓み、「肅慎」の古訓と通じる。<sup>⑮</sup>『日本書紀』に登場する「肅慎」は、当時オホーツク海沿岸から日本海沿岸を南下し、奥尻島にまで進出したオホーツク文化の集団に比定されている。<sup>⑯</sup>従つて、鞍男等六人の派遣の目的は、オホーツク海沿岸のオホーツク文化の風俗を観察するためであろう。<sup>⑰</sup>オホーツク海沿岸の枝幸町目梨泊遺跡では、

多数の蔵手刀が発見されており、関連が憶測されている。<sup>16)</sup> 渡嶋津軽津司は、日本列島北辺各地に点在した港湾拠点の管理などに携わる官司であった。とすれば、道央低地帯の政所も、津司の管轄に置かれた可能性が高い。津司の官人は、道央低地帯の政所を訪れ、交易を行い、毛皮などを入手していたのではないか。つまり、北方交易は、道央低地帯の首長層・北奥羽からの移住者・津司の官人の三者の接触によって、行われていたのであろう。また、八世紀中葉、遣渤海使を派遣する際に、藤原仲麻呂が自邸で送別の宴を催している例がある（『万葉集』卷二十）。津司を派遣する際にも、都の有力貴族が鞍馬らを接遇するなど、何らかの關係をもったかもしれない。

むろん、道央低地帯の首長層とは、文献にみえる渡嶋蝦夷のことである。すなわち、この時期の渡嶋蝦夷にとって、特産物を貢納する場合は、自らの本拠地に近い場所であり、それぞれの首長層が獲得した特産物を個別に貢納していたのであろう。

このうち、古代国家は天平五年出羽柵を秋田へ遷した時点で、渡嶋蝦夷との交易の拠点を秋田城に一元化しようとした。古代国家は、渡嶋津軽津司を廃止し、北方交易の中心に、秋田城司を据えたのであろう。しかしながら、九世紀前半まで、秋田城はそうした機能を果たすことができなかつた。出羽国俘囚七十八人が諸司と参議以上の奴婢として分配されている（『続日本紀』宝龜七年（七七六）十一月癸未条）。陸奥・出羽両国において、王臣家が俘奴婢を買い求めている（『類聚三代格』卷十九 禁制事 延暦六年正月二十一日官符）。これらの史料は、蝦夷と都の貴族の紐帯が、八世紀後半に至っても継続していることを示唆する。

しかも、延暦六年の官符は、北方史において、文献史料上、交易を行う主体としての王臣家が初めて登場してくる。想像を逞しくすれば、かつて、北奥羽と都を往来し、有力貴族の邸宅に赴いていた蝦夷たちは、俘囚・俘奴婢などとして王臣家に入り込み、その使者となり北方交易の一翼を担う存在となつたのではないか。

（史料一）は、渡嶋蝦夷が秋田城に入る前に、王臣家と取引していることを示している。さらにいえば、渡嶋から出航するときすでに、交易相手は決まっていたとみるべきであらう。とすると、津司廃止後も、都の有力貴族（王臣家）の使者たちと北海道式古墳の被葬者の後裔と道央低地帯の首長層のつながりは、継続していた。とくに、八世紀後半以降、王臣家は、交易者として活動をす蝦夷と深いかかわりをもち、北方交易に深く関与していたのであろう。そうした状況を目の当たりにした田村麻呂は、渡嶋蝦夷との交易における出羽国司（秋田城司）の権限を強化し、秋田城交易を徹底すべく進言したと捉えられる。田村麻呂は、渡嶋の支配を秋田城に任せようとしたのである。

## 二 田村麻呂プランと北奥羽

つぎに、田村麻呂によって設置された城柵が、九世紀の北奥羽の支配の拠点として、どのように機能したかについて考えたい。

田村麻呂が整備した城柵群のなかで、現在の盛岡市に立地する志波城は、古代城柵のなかでも圧倒的な威容を誇る。外郭線は、一辺八百四十メートルの築地大垣で区画された内外に大溝がめぐり、その外側には一

辺九百二十八メートルの外大溝が土塁をともなつてめぐっている。南辺と東辺ではさらに百八メートル外側に大溝が確認されており、三重区画で構築されていた。南辺築地大垣の中央には五間門が建ち、ほぼ六十メートル間隔で櫓が配置されていた。中心部にある政庁も、一辺百五十メートルの築地大垣で区画され、その内外には溝がめぐる。内部の広い空間には、中央の正殿、その前方の東西には脇殿が存在する。その周囲にも、四面廂建物や倉庫など十一棟の建物が立ち並ぶ。また、外郭築地大垣の内側に沿った百八メートルの帯状の範囲で、千〜二千軒ほどの堅穴住居群があったことが推定されている。ここは鎮兵の居住域であったともあれ、志波城は、外郭の大きさ・規模、政庁内の空間の広さ・建物の壮大さ、駐屯する鎮兵の多さなど、陸奥国府の多賀城を上回る古代城柵最大の規模であった。<sup>17</sup> 要するに、田村麻呂は、前年に構築した胆沢城よりもさらに北の地に最大の楔を打ち込んだのである。志波城は、北奥羽の支配において、田村麻呂プランの要であったことが推測される。

さらに、注目したいのが徳丹城である。徳丹城は、弘仁二年（八一）一）水害に悩まされた志波城の南十キロの地点の「便地」に建てられた。その規模は古代城柵最小で、外郭・政庁の大きさも志波城の半分にも満たない。ただし、近年の発掘調査によると、徳丹城には志波城と重なる時期に、先行官衙が存在したことが確認されている。徳丹城の東門を囲む形で、百五十メートル四方の区画溝の内部に、掘立柱建物が発見された。建物の並びは、志波城の政庁と近似している。先行官衙は、周辺に和我・稗縫・斯波の三郡が置かれているので、これらの郡家の機能を果たしたともいわれる。<sup>18</sup> 実際、先行官衙には外郭線がなく、規模や建

物配置などは郡家的な様相を呈する。また、志波城の水害の危険性は当初から予測されており、志波城から徳丹城への移転は、造営段階から計画されていたとする見方もある。<sup>19</sup> こうして先行官衙については、開始時期や性格など定見をみないが、志波城と併存した時期があったとすると、田村麻呂の手によって建てられた可能性が高い。

このほかに、胆沢城は胆沢・江刺など奥六郡の南側の地域、払田柵は横手盆地一帯の掌握を試みたと思われる。田村麻呂は、それぞれの城柵に管轄を設け、その地域の支配にあたらせたのである。

さて、志波城設置の二年後、桓武天皇の前で、藤原緒嗣と菅野真道が天下の徳政を論じ、緒嗣の意見が採用され、古代国家は北への軍事侵攻を諦める（『日本後紀』延暦二十四年（八〇五）十二月壬寅条）。確かに、これによって、関東・南東北や北陸などの各地から、兵隊・兵糧・兵器など多大な軍需物資を集めた時代は終焉する。反面、こののちも、胆沢城には鎮守府將軍が、秋田城には秋田城司などがそれぞれ派遣され続けた。つまり、国司が駐在する城柵は、北方支配において、重要性を増していく。

ところが、前述のとおり、古代国家はその六年後、河浜に近く、しきりに水害に遭ったという理由で、志波城を放棄する（『日本後紀』弘仁二年閏十二月辛丑条）。皮肉にも、この年に田村麻呂は亡くなっている。志波城の移転にあたり、その役割は、徳丹城にうつされた。実際に、北上川の水運を使って、志波城の建物に使われていた資材が運ばれている。<sup>20</sup>

〈史料四〉『日本後紀』弘仁五年（八一四）十一月己丑条

陸奥国言、胆沢・徳丹二城、遠去<sup>二</sup>国府<sup>一</sup>、狐居<sup>二</sup>塞表<sup>一</sup>。城下及津軽狄俘、野心難<sup>レ</sup>測。至<sup>二</sup>於非常<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>備。伏望<sup>二</sup>予備<sup>一</sup>糶<sup>二</sup>塩<sup>一</sup>、収<sup>二</sup>置<sup>一</sup>両城<sup>二</sup>者<sup>一</sup>之許。

徳丹城には、城下の蝦夷と津軽蝦夷に備えて、糶と塩が蓄えられていた。

〔史料五〕『日本三代実録』元慶二年（八七八）七月十日条

〔前略〕又秋田城下賊地者、上津野・火内・楡淵・野代・河北・腋本・方口・大河・堤・姉刀・方上・焼岡十二村也。（後略）

九世紀後半の元慶の乱の際、秋田城下の範囲は、上津野・火内・野代など米代川流域まで含まれていた。ここから矢立峠を越えれば、津軽の地である。城下と津軽は、それぞれ別個に認識されていた。従って、〔史料四〕も同様であったのではないか。のちの奥大道は胆沢城から北上して、上津野（鹿角）や火内（比内）を経由して、津軽へ入るルートである。むしろ、九世紀前半の段階では、米代川の上流域は、徳丹城の城下に含まれていたであろう。しかしながら、徳丹城は、最近の文献・考古双方の成果によっても、せいぜい八三〇年代には廃絶されてしまっているのである。とすると、志波城の移転・徳丹城の廃絶に際して、どここの城柵がその役割を担ったかという問題が浮上する。

そこで、志波城放棄の年に行われた文室綿麻呂の最後の征夷のコースに着目したい。この征夷では、爾薩体・弊伊・都母などが舞台となって

いる（『日本後紀』弘仁二年七月辛酉条）。弊伊村には、かつて昆布の貢納に際して郡家が建てられている（『続日本紀』靈龜元年（七一五）十月丁丑条）。従って、今回の舞台は、昆布の産地である三陸沿岸の北部から八戸周辺であった。

〔史料六〕『日本後紀』弘仁二年（八一）三月甲寅条

〔前略〕于<sup>レ</sup>時、出羽守從五位下大伴宿禰今人、謀<sup>二</sup>発<sup>一</sup>勇敢<sup>二</sup>俘囚<sup>一</sup>三百余人、出<sup>二</sup>賊不意<sup>一</sup>、侵<sup>レ</sup>雪襲<sup>二</sup>伐<sup>一</sup>、殺<sup>二</sup>戮<sup>一</sup>爾薩体余孽六十余。功冠<sup>二</sup>一時<sup>一</sup>、名<sup>レ</sup>伝<sup>二</sup>不朽<sup>一</sup>也。

このときに最も戦功を挙げているのが、出羽守大伴今人である。彼は、出羽国の俘囚を率いて、雪山を乗り越えて、爾薩体を討っている。その後、征夷将軍であった文室綿麻呂は慌てて陸奥国から兵を進めようとしており（『日本後紀』弘仁二年十月乙丑条）、むしろ手柄を奪われた感すらある。しかも、このときの戦いに、三陸沿岸に最も近く、本来ならば拠点となるべき、志波城が使われた形跡がない。とすると、今人は、秋田城または横手盆地の払田柵から北上し、米代川流域まで出たのち、三陸沿岸まで進出した可能性が高い。このルートの途上にある北秋田市胡桃館遺跡では、読経に際して米の寄進の様子を記した木簡（壁書）に、伴の姓がみえる。<sup>(2)</sup>今人が率いた俘囚のなかには、この地の首長がおり、この戦いの活躍により、今人から（大）伴姓を授けられたのではないか。そして、払田柵出土木簡には、「狄藻」と記されたものがある。「狄藻」とは、「えびすめ」と読み、昆布のことである。三陸沿岸の蝦夷の

首長と払田柵との関係を窺わせる。昆布の貢納に際して、陸奥側の城柵ではなく、払田柵が使われたことが留意される。むろん、志波城の地を通過して、払田柵に赴いたのであろう。

また、〈史料五〉にあるように、九世紀後半、現在の秋田県北・米代川流域の村々は、「秋田城下」として把握されている。秋田城下にあたる男鹿市小谷地遺跡では「雄」と坏の底部に記された墨書土器が多数出土している。ここは秋田城下十二村のなかで腋本にあたる。「雄」が雄勝城を指すとすれば、秋田城や雄勝城に駐在した国司が小谷地遺跡のような蝦夷の首長の拠点に赴き、特産物などの貢納を受けていた。<sup>22)</sup> 城下十二村には、そうした蝦夷の拠点が複数存在したのであろう。

陸奥側では、徳丹城が廃絶されて以降、秋田城と払田柵を結ぶラインには城柵は設置されない。徳丹城がなくなる理由は、陸奥出羽按察使・坂上清野が辞任して帰京する際に「夷民和して親しむ」とあるように<sup>23)</sup> 『日本文徳天皇実録』嘉祥三年（八五〇）八月己酉条、八三〇年代までほぼこの地域の蝦夷との関係が保たれたとみるか、承和・斉衡年間あたりにかけて、この地の蝦夷社会がたびたび不穏な動きをみせており、反対に維持しきれなくなったとみるか、<sup>24)</sup> 見解のわかれるところである。いずれにしても、志波城・徳丹城が担った北奥羽の支配という機能は、両城廃ののち、出羽側の秋田城ないし払田柵が果たしたと考えられる。そして、残された胆沢城には、奥六郡の支配という役割が課せられた。ところで、九世紀を通して、出羽国の住人が相当数「奥地」へ逃れている<sup>25)</sup> 『日本三代実録』元慶三年（八七九）三月二日条。さらに、「奥地」の蝦夷同士の争いも頻発する（『日本三代実録』斉衡二年（八五

五）正月丙申条。「奥地」がどこを指すかは検討課題だが、少なくとも「城下」とは区別される地域、津軽であろう。<sup>26)</sup> 田村麻呂は、志波城に津軽を含めた北奥羽全体を管轄させた。しかし、その機能を引き継いだ秋田城や払田柵は、せいぜい米代川流域までしか把握できなかった。すなわち、津軽は、北奥羽から渡嶋にかけての地域のなかで最も、田村麻呂の征夷の影響を受けなかったのである。

### 三 田村麻呂プランの歴史的意義

それでは、田村麻呂の征夷によって、渡嶋や北奥羽の蝦夷社会は、どのように変化したのか。田村麻呂プランの歴史的意義について、考えた

い。そこで、この問題を考えるにあたり、陸奥側では、胆沢城だけが長く残っていく点に注意したい。当時の奥六郡が安定化していても、不安定であったとしても、胆沢城を取り巻く状況は、徳丹城と同様であったはずである。胆沢の地は、田村麻呂の宿敵・アテルイの本拠であった。胆沢を獲得するために、覚鑿城を造るとある（『続日本紀』宝龜十一年（七八〇）二月丁酉条）など、八世紀後半以降の征夷の最大のターゲットとなっていた。胆沢の蝦夷は、「賊奴奥区」（『続日本紀』延暦八年（七八九）六月庚辰条）、「水陸万頃、蝦虜存生」（『続日本紀』延暦八年七月丁巳条）とあるなど、豊かな土地をバックとして、一大勢力を形成していた。<sup>26)</sup>

古代国家は、征夷戦に際して、現地の言葉を理解する蝦夷を訳語とし

て登用し、同行させた(『続日本紀』養老六年(七二二)四月丙戌条)。訳語は、道案内だけでなく、抵抗する蝦夷を教諭・説得する役割なども担った。胆沢の蝦夷を攻略する際にも、こうした訳語が重要な役割を果たした。

(史料七)『日本後紀』延暦十八年(七九九)二月乙未条

流陸奥国新田郡百姓弓削部虎麻呂・妻丈部小広刀自女等日向国。

久住「賊地」、能習「夷語」、屢以「謾語」、騷「動夷俘心」也。

賊地に居住し、夷語を学習し、蝦夷を煽動した陸奥国新田郡の百姓が存在した。また、野心を改めず、賊地との間をたびたび往来した俘囚が土佐国に配流されている(『日本後紀』延暦十八年十二月乙酉条)。この時期、田村麻呂の活躍により、古代国家は、まさに胆沢の目と鼻の先まで侵攻しており、賊地とは胆沢周辺のことであろう。すなわち、胆沢の蝦夷とは、当時の和人とは異なる言語・文化をもつ集団であった。時期を遡れば、ここには、日本列島最北の前方後円墳・角塚古墳が築かれ、初期のカマド付き住居や畿内産須恵器、続縄文文化の北大I式土器や黒曜石スクレイパーが発見された中半入遺跡がある。彼ら・彼女らは、こうした複合文化をもち、北方世界との交易を担った人たちの後裔だったのではないか。

さて、古代国家は、田村麻呂を征夷副將軍に据え、本格的に胆沢攻略に乗り出す。そのための作戦として、以下の出来事に注意したい。

(史料八)『類聚国史』卷百九十 延暦十一年(七九二)正月丙寅条  
陸奥国言、斯波村夷胆沢公阿奴志己等、遣使請曰、己等思「歸王」化、何日忘之。而為「伊治村俘等所」遮、無「由」自達。願制「彼遮」闕、永開「降路」。即為「示」朝恩、賜物方還。夷狄之性、虚言不「実」、常称「帰服」、唯利是求。自今以後、有「夷使者」、勿「加」常賜。

まず、(史料八)は、胆沢より北に位置する斯波(志波)村の蝦夷が投降を申し出ている。また、そうした動きは、伊治村の蝦夷によつて遮断されていた。つまり、「斯波」と「胆沢・伊治」という蝦夷間の対立も想定される。そのなかで、より北の斯波村の蝦夷が、恭順の意を示したことが興味深い。さらに、こののちには、夷爾散南公阿破蘇・宇漢米公隱賀らを入京させ、爵を授けている(『類聚国史』卷百九十 風俗俘囚 延暦十一年十一月甲寅条)。爾散南を爾薩体の南とすれば、彼らは岩手県北部の蝦夷の首長であろう。さらに、外虜を懐けたということ、俘囚吉弥侯部真麻呂・大伴部宿奈麻呂が授位されている(『類聚国史』卷百九十 延暦十一年十月癸未条)。斯波の蝦夷の投降を皮切りにした延暦十一年の動きは、胆沢よりも北の蝦夷を懐柔することで、古代国家が、南と北から胆沢を挟み撃ちにしようとしたことを示している。<sup>(28)</sup>  
そして、田村麻呂が征夷大將軍を務めた延暦二十年の征夷では、彼はその五年前から陸奥出羽按察使・陸奥守・鎮守府將軍を兼任している。胆沢城築城の際、駿河・甲斐・相模・武蔵・上総・常陸・信濃・上野・下野の九国から四千人の移民を送り込んでいる(『日本紀略』延暦二十一年正月戊辰条)。江刺郡や胆沢郡には、これら坂東諸国の名を負つて

いる郡郷名がある。彼は、この間に、胆沢より北の蝦夷たちの懐柔にあたっていたのであろう。田村麻呂が三陸沿岸の閉伊村まで赴いた可能性もある(『日本後紀』弘仁二年十二月甲戌条)。(史料七)は、この期間の出来事であり、新田郡の百姓は、当初彼の命を帯びて賊地へ工作に行ったが、反対に寝返ったため処罰されたのであろう。要するに、田村麻呂は、胆沢の蝦夷の利権を壊し、北方交易のネットワークの中心地を奪取しようとしたのではないか。胆沢の蝦夷が、北奥羽のなかで、最も経済的にも文化的にも独自性・自立性をもっていた。

さて、九世紀後半、出羽北部の蝦夷が大規模な反乱を起こす。元慶の乱と呼ばれるこの事件は、秋田城下十二村を舞台とするものであった。

〔史料九〕『日本三代実録』元慶二年十月十二日条

(前略) 又鎮守將軍從五位下小野朝臣春風、九月廿五日率<sub>二</sub>軍四百七十人<sub>一</sub>、來<sub>二</sub>着秋田宮以北<sub>一</sub>。即言曰、春風重舍<sub>二</sub>詔、先入<sub>二</sub>上津野<sub>一</sub>、教<sub>二</sub>諭賊類<sub>一</sub>、皆令<sub>二</sub>降服<sub>一</sub>。賊首七人相從同來。從<sub>二</sub>去八月<sub>一</sub>、賊降之<sub>二</sub>狀、相統不<sub>レ</sub>絶<sub>一</sub>。野心難<sub>レ</sub>量、抑而不<sub>レ</sub>許。今春風自入<sub>二</sub>賊地<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>其降書<sub>一</sub>。

これに対し、古代国家はまず出羽国の軍勢を差し向けるが、一向に埒があかなかつた。そこで、鎮守將軍小野春風と陸奥権介坂上好蔭を派遣する。彼らは、胆沢城を起点とした陸奥路から上津野に入り、米代川を下り、能代へ出て、八郎潟を南下して、秋田城へ入った。この間、春風は上津野において、反乱の勢力を説得し、降書をとった。ここで、留意

したいのは、春風が上津野へ向かった八月以降、反乱の火の手が急速に収まることである。

〔史料一〇〕『日本三代実録』元慶五年(八八一)五月三日条  
授<sub>二</sub>陸奥蝦夷詠語外從八位下物部斯波連永野外從五位下<sub>一</sub>。

物部斯波連氏は、俘囚吉弥侯宇加奴らに与えられた姓であり(『続日本後紀』承和二年(八三五)二月己卯条)、もともと斯波方面に勢力を張った蝦夷である。元慶の乱という非常事態に際して、永野は、春風が陸奥路を進む際に現地の蝦夷の話す言葉を理解する詠語として、協力を惜しまなかつたために、大昇進したのであろう。胆沢城跡からは、「斯波□」と墨書された土器や「和我□□進白五斗」と記された木簡が出土している。<sup>(29)</sup>胆沢城では、蝦夷に対して「俘饗」などの饗給儀礼が行われている(『類聚三代格』貞観十八年(八七六)六月十九日官符)。これらの墨書土器や木簡は、斯波や和 my の蝦夷への饗給に関わるものであろう。さらにいえば、そうした儀礼を円滑に進めるためには、詠語の存在が必須と考えられる。彼らは、何度も胆沢城へ朝貢に赴いたのち、関係を深め、詠語などとして登用されたのではないか。さらに、春風自身も夷語に精通しており(『藤原保則伝』、詠語に携わった蝦夷とも密接な関係をもっていた。つまり、古代国家は、元慶の乱の鎮圧にあたり、在庁官人として登用された、斯波・和我など胆沢より北の蝦夷の力を借りたのである。

また、この時期、王臣家の使者が陸奥出羽両国を訪れ、蝦夷に対して

馬を買い求めていることがしきりに問題視されている（『藤原保則伝』）。北奥羽の馬産は、のちに糠部駿馬といわれる名馬を生み出すほど著名で、すでに七世紀後半あたりから八戸周辺で始まっている。<sup>30</sup>むろん、こうした馬の取引も、国府や城柵において、国司（城司）の面前で行われたとは考えにくい。王臣家の使者たちは、馬を飼育する蝦夷の拠点に足を運んでいたであろう。とすると、取引の場は、遠く城柵を離れた地域にまで及んでいた可能性がある。

また、国司が蝦夷に対して、盛んに位階を与えていたことも知られる（『類聚国史』巻百九十 大同二年（八〇七）三月丁酉条）。これも九世紀を通じて、古代国家の規制にもかかわらず、続けられた。不正行為が、公の機関である城柵で行われたとは思われない。やはり、国司が蝦夷の拠点に向いて行ったとみるべきではないか。当然、位階の見返りには、特産物などの貢納があったのであろう。

さらに、九世紀代には、胆沢城の周辺を起点として、のちの奥大道のルート沿いに、在地の首長層の拠点と捉えられる遺跡群が分布する。<sup>31</sup>これらの遺跡群では、祭祀具や農耕具などの木製品がふんだんに出土する。王臣家や国司の進出を契機として、蝦夷の首長間に文化受容などの面のつながりができたことが想定される。しかも、そうした首長層のなかには、胆沢城の在庁官人として、支配機構に深く入り込んでいくものも出現した。

田村麻呂の征夷以降、一旦は、志波城・徳丹城、それを引き継いだ秋田城・払田柵（雄勝城）が北奥羽の支配を担うことによって、古代国家が胆沢の利権を抑えたかにみえた。しかしながら、蝦夷たちのネットワ

ークや王臣家・国司の活発な動きなどは、彼の想定をはるかに越えるものであった。とくに、斯波・和我などの北の蝦夷が、胆沢に進出していることが注目される。むしろ、田村麻呂に付いた斯波・和我など胆沢より北の蝦夷たちは、田村麻呂プランを消化・吸収して、自らの勢力を伸張させたのではないか。彼ら・彼女らは、在庁官人として登用されたのち、胆沢周辺に土着したのであろう。このことは、征夷以降も、胆沢が交易・文化両面において北奥羽の中心地であったこと、その担い手は、胆沢に進出した北の蝦夷たちに変化したことを意味する。ともあれ、このうち胆沢城の存在は、格段にクローズアップされてくるのである。胆沢城は古代国家側のみでなく、蝦夷たちにとっても重要な役割を果たすことになる。

〈史料一〉『日本三代実録』貞観十七年（八七五）十一月十六日条  
出羽国言、渡嶋荒狄反叛。水軍八十艘、殺略秋田・飽海両郡百姓  
廿一人。勅<sub>二</sub>牧宰<sub>一</sub>討<sub>二</sub>平之<sub>一</sub>。

渡嶋蝦夷の動向にも目を配りたい。九世紀後半、北海道では、擦文文化が日本海沿岸の港湾地帯に進出し、交易拠点を築きだす。しかも、秋田郡のみではなく、飽海郡まで南下している。日本海を北と南に勢力を拡大させていく、擦文文化の志向が窺われる。

それとともに、水軍八十艘という大船団を組織していることに注意したい。元慶の乱のさなか、渡嶋夷首百三人が秋田城に朝貢している（『日本三代実録』元慶三年（八七九）正月十一日条）。大規模な使節の

背後には、それぞれの首長傘下の集団が存在したはずである。この時期、日本列島北部では、鳥海山の噴火、貞観大地震など天変地異が相次ぎ、陸奥国や出羽国も飢饉に苦しんでいる（『日本三代実録』貞観十五年（八七三）三月二十日条、元慶五年（八八一）八月十四日条）。とする  
と、渡嶋においても同様の状況が想定でき、そこに暮らす人々は、日々の営みにおいて、自然環境の変化の影響を受けていたはずである。

〈史料一二〉『日本三代実録』元慶五年（八八一）八月十四日条

先是、出羽国司言、去元慶元年穀稼多損、調庸不備。二年夷虜反叛、国内騷擾。義從俘囚及諸郡田夷并渡嶋狄等、或疲於傲、或慕化遠来。開用不動穀三千二百卅七斛五斗、以充大饗。不先言上、責在牧宰。至是、勅免除。

そこで、秋田城司は、前述の渡嶋夷首百三人に対して、不動穀を用いて、厚遇したことが興味深い。飽海郡を襲つたり、秋田城を訪れたりした渡嶋蝦夷も、食糧確保などの使命を有していたのであろう。

こうして、大船団を組んで秋田城に來航する姿は、道央低地帯を中心とした首長層のまとまりを感じさせる。<sup>32</sup>つまり、九世紀の渡嶋蝦夷は、田村麻呂プランを契機として、それまでの個別に政所に貢納に赴いていたのとは違った形式で、首長層の連携などの組織化を図ったのではないか。さらにいえば、こうした組織化は十世紀以降の擦文社会の生産・交易の分業などの体制にもつながるのであろう。<sup>33</sup>

また、道央低地帯では、恵庭市茂漁8遺跡で隆平永宝、千歳市ウサク

マイン遺跡で富寿神宝が出土している。<sup>34</sup>隆平永宝は田村麻呂の征夷期、富寿神宝も九世紀前半に鑄造された皇朝錢である。和同開珎は移住者もたらしたのに対し、富寿神宝と隆平永宝は秋田城などにおいて、渡嶋蝦夷が特産物の対価として入手したのであろう。同じ皇朝錢であっても、使い手の出自は異なっていたと思われる。擦文社会には、十世紀以降の珍重品として、僅かながら銅椀が流通する。<sup>35</sup>皇朝錢も銅を素材としている。銅椀と同様に、皇朝錢も擦文社会において、重要な役割を果たしたのではないか。

九世紀後半以降、津軽五所川原に須恵器窯群が営まれた。ここで生産された須恵器は、津軽一帯と渡嶋に輸出された。毛皮などの特産物の対価に用いられたのであろう。この須恵器作りはもともと福島県の会津や浜通りの人たちが有する技術であった。<sup>36</sup>さらに、時期が下ると、前九年合戦のさなか、源頼義は氣仙郡司・金為時を八戸周辺に派遣して、現地の首長・安倍富忠を味方に引き入れた。これも南と北から奥六郡を挟み撃ちにする策であろう。さらに、奥州藤原氏が滅びる際も、藤原泰衡は鹿角方面へ逃げるが、ここで部下の裏切りに遭い、殺された。頼朝も、奥六郡より北の勢力を抱き込んでいた可能性が高い。日本列島の歴史が古代から中世へと転換していくなかで、都の貴族や坂東の武士たちは、アザラシ・クロテンの毛皮など北方産の様々な特産物を渴望し続けた。すなわち、これ以降の前九年・後三年合戦、奥州合戦に至る過程において、津軽や八戸周辺など本州最北端の蝦夷たちを介在させつつ、奥六郡の蝦夷たちと渡嶋蝦夷たちをどう結び付けるかが、大きな課題となるのである。

## おわりに

本稿は、坂上田村麻呂が設置した城柵に着目して、延暦期の征夷は、北奥羽と渡嶋の支配体制の再編を目的としていたことを指摘した。とくに、志波城を新たに設置し北奥羽の支配、秋田城で渡嶋蝦夷との交易管理の強化を目論んだ。ところが、田村麻呂プランは、志波城・徳丹城を維持することができず、ほどなく挫折する。その機能は、出羽側の秋田城もしくは払田柵に引き継がれた。

一方、征夷の最大のターゲットであった胆沢は、九世紀を通しての一連の流れのなかでも、北奥羽の交易・文化の中心地としての役割を果たし続けた。しかし、その担い手は、田村麻呂プランを利用して、勢力を伸張させた、和我・斯波など胆沢より北の蝦夷たちであった。彼ら・彼女らは、鎮守府の在庁として入り込み、胆沢周辺に土着し、胆沢城を存続させる原動力となった。古代国家は、元慶の乱を鎮圧する際、こうした蝦夷たちの力に頼らざるを得なかったのである。

また、渡嶋においても、田村麻呂の征夷の影響が色濃くみられる。それまでの北方交易は、比羅夫の設置した政所において、都から派遣される使者と北奥羽からの移住者・道央低地帯の首長層の三者の関係によって行われていた。七世紀中葉以来、この三者は、北奥羽と都を往来し、有力貴族とも密接な関係を持ち、交易者としての活動もする蝦夷によって結び付けられていた。そうした蝦夷は、八世紀後半に入り、俘奴婢などとして王臣家に入り込み、北方交易に携わっていた。それに対して、

田村麻呂以降は、出羽国司（秋田城司）の権限を強化し、渡嶋を管轄させ、首長層が秋田城へ来航していく形態での交易が行われた。こうした交易方式の変化に応じつつ、擦文社会は、深化していくのである。ともあれ、胆沢周辺や道央低地帯は、日本列島と北方世界をつなぐ重要な地域であった。北方の特産物の獲得をめぐる交易の場であり、人々の接触・葛藤の場でもあった。坂上田村麻呂の征夷とその後の動きは、そうした交流の一端を示してくれるのである。

## 註

- (1) 鈴木拓也「払田柵と雄勝城に関する試論」『古代東北の支配構造』吉川弘文館 一九九八年
- (2) 秋田市教育委員会『秋田城跡―政庁編―』二〇〇二年
- (3) 養島栄紀「古代出羽地方の対北方交流―秋田城と渡嶋津司の史的特質をめぐって―」『古代国家と北方社会』吉川弘文館 二〇〇一年
- (4) 大沼忠春「北海道の文化」『古代の都と村』講談社 一九九九年
- (5) 北海道考古学会『北海道式古墳の系譜―擦文文化の墓制をめぐって―』一九九八年
- (6) 中田裕香「擦文時代の紡錘車について」『古代文化』四一―六一九〇年、「擦文文化の土器」『新北海道の古代』三 北海道新聞社 二〇〇四年
- (7) 新井隆一「北海道式古墳と七・八世紀の太平洋沿岸交通」『貝塚』六三 二〇〇七年
- (8) 宇部則保「古代東北地方北部の沈線文のある土師器」『考古学ジャーナル』四六一―二〇〇〇年

- (9) 北海道考古学会 前掲註(5) 書
- (10) 八木光則「末期古墳副葬品からみた蝦夷社会の交流」『古代蝦夷社会の成立』同成社 二〇一〇年
- (11) 鈴木靖民「王興寺と飛鳥寺の創建」『古代文化の源流を探る』百濟王興寺から飛鳥寺へ』國學院大學文化講演会
- (12) 酒寄雅志「東北アジアのなかの渤海と日本」『渤海と古代の日本』校倉書房 二〇〇一年
- (13) 熊田亮介「蝦夷と蝦狄」『古代国家と東北』吉川弘文館 二〇〇三年
- (14) 天野哲也「極東民族史におけるオホーツク文化の位置」(下)『考古学研究』二五—一 一九七八年、山浦清「続縄文から擦文文化成立期にかけての北海道・本州間の交流―その交易のシステムの展開―」『現代の考古学』五 朝倉書店 二〇〇〇年
- (15) 養島栄紀 前掲註(3) 論文
- (16) 大沼忠春「北海道の古代社会と文化―七世紀〜九世紀」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版 一九九六年
- (17) 西野修『志波城・徳丹城跡』同成社 二〇〇八年
- (18) 西野修 前掲註(17) 書
- (19) 平川南『日本の原像』小学館 二〇〇八年
- (20) 西野修 前掲註(17) 書、平川南 前掲註(19) 書
- (21) 山本崇・高橋学「胡桃館遺跡出土木簡の再釈読について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』二〇 二〇〇六年、木簡学会編『木簡から古代がみえる』岩波新書 二〇一〇年
- (22) 新井隆一「古代北奥羽の律令的祭祀」『古代文化』五八—一 二〇〇六年
- (23) 樋口知志「文献史料からみた9世紀前半の奥羽北部の城柵」『第35回古代城柵官衙検討会資料集』
- (24) 淵原智幸「九世紀陸奥国の蝦夷・俘囚支配―北部四郡の廃絶までを中心―」『日本史研究』五〇八 二〇〇四年
- (25) 熊田亮介「元慶の乱関係史料の再検討―『日本三代実録』を中心として―」前掲註(13) 書
- (26) 鈴木拓也『蝦夷と東北戦争』吉川弘文館 二〇〇八年
- (27) 岩手県埋蔵文化財センター『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』二〇〇二年
- (28) 高橋崇『坂上田村麻呂』吉川弘文館 一九八六年
- (29) 水沢市埋蔵文化財センター『胆沢城展』二〇〇二年
- (30) 三浦圭介「古代」『弘前市史』資料編 考古編 一九九五年
- (31) 新井隆一 前掲註(22) 論文
- (32) 養島栄紀「渡嶋蝦夷の社会段階と組織化」前掲註(3) 書
- (33) 瀬川拓郎『アイヌの歴史―海と宝のノマド―』講談社選書メチエ 二〇〇七年、養島栄紀「北方社会の史的展開と王権・国家」『歴史学研究』八七—二 二〇一〇年
- (34) 恵庭市教育委員会『茂漁7遺跡・茂漁8遺跡』二〇〇四年
- (35) 瀬川拓郎『アイヌの世界』講談社選書メチエ 二〇一一年
- (36) 松本建速『蝦夷とは誰か』同成社 二〇一一年
- (あらい・りゅういち 大日本図書)

〈表〉田村麻呂の征夷の足跡

回数	年	役職	田村麻呂の主な動き	備 考
1	延暦13年 (794)	征夷副使	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦10.1 東海道諸国の軍士・戎具を検閲</li> <li>延暦10.7 征夷副使に任命</li> <li>延暦12.2 天皇に辞見</li> <li>延暦13.6 蝦夷と戦闘</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦11.1 斯波村の蝦夷、投降〈史料八〉</li> <li>延暦13.1 征夷大將軍大伴弟麿に節刀を賜与</li> <li>延暦13.10 大伴弟麿、戦果を報告</li> <li>延暦14.1 大伴弟麿、節刀を返上</li> <li>延暦14.2 大伴弟麿らに授位</li> </ul>
2	延暦20年 (801)	征夷大將軍	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦15.1 陸奥出羽按察使・陸奥守に任命</li> <li>延暦15.10 鎮守府將軍に任命</li> <li>延暦16.11 征夷大將軍に任命</li> <li>延暦19.11 諸国の夷俘を検校</li> <li>延暦20.2 節刀を賜与</li> <li>延暦20.9 戦果を報告</li> <li>延暦20.10 節刀を返上</li> <li>延暦20.11 田村麻呂らに授位</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦18.2 賊地に居住し、夷語を操った新田郡百姓を配流〈史料七〉</li> <li>延暦19.10 征夷副將軍を任命</li> </ul>
3	延暦21年 (802)	造胆沢城使	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦21.1 胆沢城造営のため赴任(造胆沢城使任命か)</li> <li>延暦21.4 胆沢の蝦夷の総帥、アテルイ、モレらを投降させる</li> <li>延暦21.7 アテルイ、モレらを従えて入京</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦21.1 関東諸国の浮浪人を胆沢城周辺へ移住させる</li> <li>延暦21.1 越後国の米と佐渡国の塩を出羽国雄勝城へ運送し、鎮兵糧とする</li> <li>延暦21.6 王臣家と渡嶋蝦夷との私交易を禁止〈史料一〉</li> <li>延暦21.8 アテルイ、モレらを斬刑に処す</li> </ul>
4	延暦22年 (803)	造志波城使	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦22.3 造志波城使として、天皇に辞見</li> </ul>	
5	延暦23年 (804)	征夷大將軍	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦23.1 征夷大將軍に任命</li> <li>延暦23.8 行宮地を選定のため、和泉・摂津に派遣</li> <li>延暦23.10 和泉国蘭生野の桓武天皇の胤に従う</li> </ul> <p>(※実際に、東北へは赴かなかったか)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>延暦23.5 志波城と胆沢郡との間に一駅置く</li> </ul>